

第八章 子なる神・受肉

受肉について考えるとき、二つの重要な真理を悟るべきである。それは(1)キリストは同時に、絶対的な意味で、神そのもの、人そのものになられたこと。および(2)人となられたことで、キリストはその栄光を一時的にわきへ置かれたが、いかなる意味でも神性を放棄されたことはなかったことである。受肉の状態においても主イエスは、神としての本質的属性をすべて保っておられた。主イエスが完全に神であり、完全に人であることは、十字架上の主のみわざにとって不可欠である。もし主が人でなかったら死ぬことはできなかったし、神でなかったら主の死が無限の価値をもつことはなかったであろう。

主イエスの神的な本質は、主が人であったという事実でいささかも制限されなかったし、人としての必要を神として持つておられる能力で満たされることはなさらなかった。

I キリストの人間性の事実

- 1、キリストが人となることは、世界の基が置かれる前から意図されていた。
(エペソ 1:4-7、3:11、黙示録 13:8)
キリストが小羊と呼ばれていることの意味は？
- 2、キリストに関する旧約聖書のすべての予型(タイプ)と預言は受肉の御子をあらかじめ想定して与えられたものであった。
- 3、キリストの人間性の事実は、イエスの受胎告知と誕生の中に見られる。
(ルカ 1:31-35)
- 4、主イエスの地上での生涯は、主の人間性を表していた。
 - (1) 人としての名前によって
 - (2) 人としての出身によって
 - (3) 人としての肉体、魂、精神を持たれたことによって
 - (4) 自らに人間としての制約を課せられたことによって
- 5、キリストの人間性は、その死と復活のうちに見ることができる。
- 6、キリストの人間性の事実は、キリストが天に昇られ、現在、栄光を受けた人のからだをもってご自分の民のためにとりなしておられることのうちに見られる。

II 受肉の理由

- 1、主イエスは神を人に啓示するために来られた。
(マタイ 11:27、ヨハネ 1:18、14:9、ローマ 5:8、Iヨハ 3:16)
- 2、主イエスは人間の真の姿を示すために来られた。キリストはすべての信者の模範であり(Iペテ 2:21)、すべての未信者を救おうとしておられる。
- 3、主イエスは罪のための供え物となるために来られた。(ヘブル 10:1-10)
- 4、主イエスは悪魔のわざを破壊するために、肉体をもって来られた。
(ヨハネ 12:31、16:11、コロサイ 2:13-15、ヘブル 2:14、Iヨハ 3:8)
- 5、主イエスは神に関する事柄において、慈愛に満ちた忠実な大祭司となるためにこの世に来られた。(ヘブル 2:16、17、8:1、9:11、12、24)

6、主イエスはダビデの契約を成就するために、肉体をもって来られた。

(Ⅱサム 7：16、ルカ 1：31-33、使徒 2：30、31、36、ローマ 15：8、黙示録 19：16)

7、受肉した主イエスは、教会にとってすべてのかしらとなられる。(エペソ 1：22)

受肉において、神の御子は単に人間の肉体を持たただけでなく、人間の魂と精神も持たれた。こうして人間存在の物質面、非物質面を備えることで完全な人となられた。

「最後のアダム」(Ⅰコリ 15：45)と呼ばれるにふさわしく、人類と密接に、永久的にかかわりを持たれた。永遠の御子、神である主は、マリヤの子、ナザレの少年、ユダヤの教師、カルバリの小羊であった。そして今は、人々の救い主、大祭司、きたるべき花婿、主であるが、やがては栄光の王となられるのである。